

## マルコによる福音書 7章 14節～23節

2016年4月28日

古本 靖久

1、聖歌 491番 「あめなる喜び こよなき愛を」

2、お祈り

3、聖書輪読 （新約聖書 74 ページ）

4、テキストの位置

前回の箇所では、イエス様はファリサイ派の人々や律法学者たちが、伝統や伝承に固執していることを指摘しました。

その伝承の中には、「清い」、「汚れ」という区別がありました。彼らはその区別によって人を排除し、自分たちの周りに壁をつくり上げていました。しかしイエス様は、彼らが「汚れている」と遠ざけていた人々と共に歩まれたのです。

旧約聖書の中には「食物規定」というものがあります。そこには清い食べ物と汚れた食べ物があり、汚れた食べ物は食べてはならないとされていました。しかしイエス様は、それらの規定について、新しい見解を示されます。

ではイエス様は旧約聖書によって定められた規定をどのように考え、わたしたちに何を教えようとしておられるのでしょうか。

福音は外の世界へ	6:6b-13	弟子たちの派遣
	6:14-29	洗礼者ヨハネ、殺される
	6:30-44	食事の奇跡
	6:45-52	水の上の顕現物語
	6:53-56	まとめの句
	7:1-13	父祖たちの伝承とは
	7:14-23	旧約聖書の食物規定
	7:24-30	異邦人のいやし
	7:31-37	デカポリスでのいやし

主はモーセとアロンにこう仰せになった。イスラエルの民に告げてこう言いなさい。地上のあらゆる動物のうちで、あなたたちの食べてよい生き物は、ひづめが分かれ、完全に割れており、しかも反すうするものである。従って反すうするだけか、あるいは、ひづめが分かればだけの生き物は食べてはならない。（レビ記 11 章 1～4 節）

<汚れているものの一例>

らくだ、岩狸、野兎、いのしし、ひれやうろこのない魚類、禿鷲、ひげ鷲、黒禿鷲、鳶、隼の類、鳥の類、鷲みみずく、小みみずく、虎みみずく、鷹の類、森みみずく、魚みみずく、大このはずく、小きんめみみずく、このはずく、みさご、こうのとり、青鷲の類、やつがしら鳥、こうもり。

## 5、節ごとに

### ◆旧約聖書の食物規定

**7:14** それから（そして）、イエス（彼）は再び群衆を呼び寄せて（彼らに）言われた。「皆、わたしの言うことを聞いて悟りなさい。」

前回の場面での聞き手は、ファリサイ派の人々とエルサレムから来た数人の律法学者たちでした。しかしここからイエス様は群衆に対して語りかけます。「群衆たちを呼び寄せて」とあるので、今までいた場所と同じところで話し出したのでしょう。

したがってファリサイ派の人々や律法学者たちはまだイエス様の近くにいたかもしれません。その中でイエス様は話し出します。

そしてイエス様は「聞いて悟りなさい」と言われます。ただ聞くだけでは分からない何かがあるのでしょうか。「聞く耳」を持たなければ理解できないということなののでしょうか。

**7:15** （人の）外から人の体（中）に入るもので人を汚すことができるものは何もなく、人の中から出て来るものが、人を汚すのである。」

人の外から人の中に入るものといえば、まず思い浮かべるのは食べ物でしょう。つまりイエス様はここで、「人を汚す食べ物などはない」と言い切っています。

しかし1 ページで確認したように、旧約聖書のレビ記には「汚れているもの」として様々な動物、魚、鳥、昆虫などが書かれています。それらのものは、食べてもいけないし、死骸に触れてもいけません。

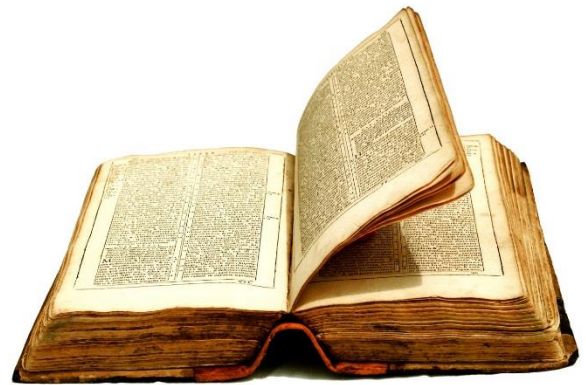
現在でもユダヤ教徒やイスラム教徒（ムスリム）は食物規定を守っています。しかし同じ聖書（旧約聖書）を持っているはずのキリスト教では、そのようなことは言っていません。それはここで「人の外から人の中に入るもので、人を汚すものはない」と、イエス様がはっきりと宣言されたからです。

そして同時に「人の中から出て来るものが、人を汚す」と言われます。つまり外見的な清さや汚れは関係なく、汚れは人の内側から出て来るものだということです。

先月、汚れが身についていないかを心配して、必死で手を洗ってからでない食事をしていないユダヤ人の姿を見ました。どれだけ外側をきれいにしても、人は内側から汚れていくのだとイエス様は言います。わたしたちにも身に覚えはないのでしょうか。

7:16 †【聞く耳のある者は聞きなさい。】

わたしたちが持っている新共同訳聖書を見ると、15節と17節のあいだに16節がありません。そのかわりに「†」という十字架マークがついています。この記号の説明は、聖書の「凡例」に書いてあります。(凡例がついていない聖書もあります)。

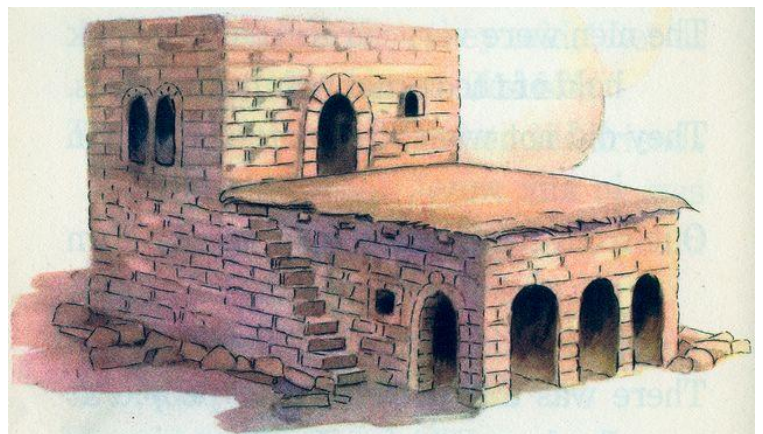


凡例にはこのようにあります。「新共同訳の底本に節が欠けていることを示す。この部分の異本による訳文を当該書の末尾に付した」。聖書は長い年月をかけて、何度も人の手によって書き写されてきました。その過程で、故意または不注意で、書き加えられたり削除されたりする言葉や文章が出てきました。

この16節もその一つです。元々この文はなく、途中で書かれたと考えられているのです。しかしこの言葉は4章9節、4章23節にも出て来たものでした。たとえ話の最後に、決め台詞として用いたとも考えられます。

7:17 (そして) イエス (彼) が群衆と別れて (から離れて) 家に入られると、(彼の) 弟子たちはこのたとえについて (彼に) 尋ねた。

群衆に話し終えたあと、イエス様は弟子たちと一緒に家に入ります。今回はファリサイ派の人々や律法学者たちもついて来ることはできなかったと思われま



す。弟子たちは群衆から離れて、ひそかにイエス様にたとえの意味を聞きます。このような場面は、以前にもみられました。

「イエスがひとりになられたとき、十二人と一緒にイエスの周りにいた人たちがたとえについて尋ねた。(4章10節)」

ここだけを見ると、イエス様は弟子たちにだけ秘密を明かしているようにも思えます。しかし次の節を読むと、そうではないことがわかります。

7:18 (そして) イエス (彼) は (彼らに) 言われた (う)。「あなたがた (まで) も (また)、そんなに物分かりが悪いのか。すべて外から人の体に入るものは、人を汚すことができない (などありえない) ことが分らないのか。

弟子たちはイエス様にこのたとえの持つ意味を尋ねました。するとイエス様は「そんなに物分かりが悪いのか」と怒ります。聖書では「あなたがたも」と訳されていますが、原文では強調の表現が二重に用いられていることがわかります。つまり、「よりによって、あなたがたさえもなのか！」という、日本語では表現しづらい言い方になるのです。

ここで強調されているのは、「弟子の無理解」です。弟子たちはイエス様のすぐそばにいて、いつも話を聞いていたにもかかわらず、なかなかイエス様の言葉が理解できません。種蒔きのたとえのときもそうでした。

その無理解は、受難予告のときにもみることが出来るのですが、マルコ福音書で強調されているのは、「弟子たちですら無理解だった」という点です。弟子たちの評価をおとしめようというのではなく、イエス様の一番近くにいた弟子たちでさえ、自分たちの力ではイエス様が何者か、知ることができなかつたのです。

少し先取りになりますが、イエス様の十字架と復活を経験してからでないと、イエス様がいったい何者なのかはわからないのだとマルコ福音書は書きます。つまり弟子たちであろうとも、復活のイエス様に出会わなければイエス様の本当の姿を理解することができないのです。

わたしたちも同じです。いくら神学者が書いた難しい本を読んでイエス様のことを論理的に証明しようとしても、また神さまのことを一生懸命で理解しようとしても、イエス様の本当の姿は見えてきません。復活のイエス様を感じ、心の中に受け入れて初めて、わたしたちはイエス様こそ救い主であると知り、イエス様に出会うことができるのです。

7:19 それは人の心の中に入るのではなく、腹の中に入り、そして外に出される (便所に行くだけだ)。こうして、(彼は) すべての食べ物は清められる (を清いとされた)。

食事の前にすいません。食べ物のことを考えてみてください。どんな食べ物を口から入れても、結局は同じように便所行きです。それがどんなに「清い」食べ物であろうとも、また「汚れた」食べ物だったとしても、すべて行きつく先は便所でしかないのです。

新共同訳聖書を翻訳した人は、イエス様に便所という言葉を使いたくはないと思ったのかもしれませんが。しかし、「便所に行くだけだ」と確かにイエス様は言われています。

この言葉は何を意味するのでしょうか。イエス様は言われます。食べ物はすべて同じようにお腹を通り、外へと排出されるだけだと。食べ物が人の心に何か影響を与えるわけではないのです。



つまり食べ物に清い、汚れているという区別はないのだと。そもそもすべての食べ物は神さまがつくられたものです。その中に汚れたものなど存在しない。すべてが清いのだ。そのようにイエス様は宣言されたのです。

**7:20-23** 更に、(彼は) 次のように言われた。「人から出て来るものこそ、人を汚す。(すなわち) 中から、つまり人間(たち)の心(の中)から、悪い思いが出て来るからである。みだらな行い(淫行)、盗み、殺意(殺人)、姦淫、貪欲、悪意(悪行)、詐欺、好色、ねたみ(悪い目)、悪口(冒瀆)、傲慢、無分別(愚かさ)など、これらの悪はみな中から出て来て、人を汚すのである。」

最後の 4 節は一気に行きたいと思います。人を汚すような食べ物などないとイエス様は言われました。では何によって人は汚されるのでしょうか。それは心だと言うのです。

神さまとの関係の中で、わたしたちは外的・物的なものによって汚されることはありません。そのことをイエス様は示します。それは汚れているとされた徴税人や罪人と食事をし、血を流している人に寄り添い、病人をいやすイエス様の姿に見ることができます。

自分たち自身を汚すのは、人の思いなのです。聖書には 12 の項目が書かれています。前半 6 つは複数形で後半 6 つは単数形になっていることから、前半の淫行、盗み、殺人、姦淫、貪欲、悪行は繰り返される行為だという人もいます。

いずれにせよ、これらの項目はほぼすべて単なる考えではなく、行為を示しています。そのような行為も、悪い思いから出て来るといえることでしょう。

それぞれの項目の説明は省きますが、12 という数字は完全数なので、項目の数を 12 にあわせたということも考えられます。12 という数字はイスラエル民族の数やお弟子さんの数など、聖書の中にも見ることができます。

しかしこれらの良くない行為はすべて、わたしたちの心から出て来ているのです。そのことを弟子たちに、イエス様は教えようとされたのでした。

## <今日の箇所から>

清くありたい。それはわたしたちがいつも願うことかもしれません。汚れたものから身を守りさえすれば、自分自身を清いままに保てるという思いを持つこともあります。中世の修道士たちはそのような考えのもと、世俗と離れた生活を選びました。しかし残念ながら、墮落してしまった修道士が多くいたことも事実です。



日本語に「魔が差す」という言葉があります。「悪魔が心に入りこんだように、一瞬判断や行動を誤る」という意味です。しかしある人が言いました。「そんなに簡単に悪魔のせいになっているけれども、悪魔はあなたになんか興味を示していないよ」と。

わたしたちは、イエス様に言われるまでもなく、自分の心が悪い思いや行いを引き起こしていることに、心の中で気づいているのではないのでしょうか。しかし、それをなかなか受け入れられないのです。

イエス様は旧約聖書にあった食物規定を廃棄します。しかしそれは旧約の律法全体を否定するのではなくて、「汚れ」という考え方によって人や物を分け隔てする人々に悟らせるためになされたことでした。そして自分たちが「汚れた」思いを持ってしまうことは、他ならぬ自分の心に原因があるということ、イエス様は伝えておられます。

わたしたちはどうしたらよいのでしょうか。わたしたちは汚れた思いを持つ者であるという自覚を持つべきではないのでしょうか。わたしたちの心をたとえるならば、とても濁った水なのかもしれません。自分の力では、その水を清く透明な水にはすることなどできません。

しかし、一つだけ方法があります。それは圧倒的な水量のきれいな水に、心を洗われることです。わたしたちが聖書を読み、祈り、賛美するときに、イエス様に触れ、その清い水にわたしたちの心の濁りを洗い落してもらっています。でもわたしたちの心の中にある悪い心は、またすぐにわたしたちの心をよごしてしまうでしょう。

だからイエス様が必要なのです。何度も洗っていただくために、わたしたちはいつもイエス様を求め、イエス様の声を聞くことが必要なのです。

今回の学びはこれで終わります。次回は5月26日(木)10時30分からです。「異邦人のいやし」(マルコ7:24~30)について学んでいきます。